

2004年2月、病魔は思わぬところからやってきた。突然左手が動かなくなつた。すぐに救急にて病院へ向かった。そのときの私は誠にラッキーだった。宿直の医師が神経内科の医師。すぐにCTをかけ処置をしてくれた。脳血栓、脳梗塞は処理スピードが勝負。数日で現状に復帰。それ以来現在まで脳血栓の薬は欠

## がんから学ぶ

—がんサロン主宰者が語る—



1937年5月、石川県金沢市生まれ。同志社大学文学部卒。特殊精密機器メーカーの横フジキン総務部長兼改革推進室リーダーを経て、1994年3月、1ターンの益田市移住。益田ドライビングスクール合宿型システム作りを依頼される(ガアの夜明けで放映)。その後、C・T・V創生研究所設立。地域で観光、定住、教育、医療など街おこしを実施。2005年12月、全国初のがんサロン開設。

島根益田がんケアサロン 代表  
C・T・V創生研究所 所長 納賀 良一

## 手術に“3倍の資金”、“倍以上の痛み”

かしたことはない。

年をとるといろいろなところに欠陥が出てくる。新しい病気にかかると本来の病気に対する危機意識が薄れ、おろそかになる。これがまた怖い事なのだ。

2004年6月、突然39・6度の高熱が出た。かかりつけ内科医にて点滴を受ける。風邪との診断だ。5日後、再度高熱が出る。これはおかしい。泌尿器科医院に行き、腹部エコーをかける。尿管内に腫瘍あり。至急精密検査が必要との指示で益田日赤病院へ。CT、MRI検査の結果、左尿管がんとの診断。尿管が詰ってしまっている。即入院を告げられる。これまでの部位とは違う。転移が想像された。次から次へどうして俺だけが…。

7月10日、入院。告げられた診断は臓器摘出手術が必要なほどいがん。部位は膀胱と左尿管と腎臓。両方とも摘出するのがベターと告知された。しかしこれまでも身体には一度もメスを入れたことはない。それも臓器を同時に2個も同時に取ったほうが良いとの診断だ。これにはさすがに参った。でも最終的には自分が判断しなければ。あまり時間がない。

考えた末、自分の出した結論は、膀胱は従来の手術(TUR)にとどめ、左腎臓・尿管だけは摘出する。このような結論を出した。それは益田日赤病院での症例数に関係があったからだ。どの手術も症例数があまりに少ない。やはり膀胱を摘出するのは並みの手術ではない。経験がものを言う。膀胱はこれまで何度も何度もごまかしながらも温存してきた経緯がある。「まずは左腎臓・尿管をとる」。自分でそう決めた。

しかしちょっととした油断が大ごとを引き出してしまった。お金と痛い思いが重なって自分に襲ってきたからだ。3倍くらいの資金と2倍以上の痛み。がんになったのなら完治と言う言葉は無いものと思わねばいけない。いつかは次のがんの目が出てくる。それも何処に出て来るかはわからない。厄介な病気だ。